

第3号

2015年
2月発行

ふみ

古典籍共同研究
事業センターニュース
 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
 国文学研究資料館
 古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

日本語の歴史的典籍の
国際共同研究

ネットワークへの期待

東京大学名誉教授 石上 英一

①～③

〔共同研究紹介・公募型〕

「草双紙を中心とした

近世挿絵史の再構築」

経過報告

実践女子大学教授 佐藤 悟

④

日本漢詩文における

古典形成の研究ならびに

研究環境のグローバル化に

対応した日本漢文学の

通史の検討

大阪大学大学院学際研究科「メディア・リテラシー」准教授

合山林太郎

⑤

分野別画像収集・医学

―研医会図書館―

古典籍共同研究事業センター 特任准教授

金田房子

⑥

コラム「引越しの花」

片岡 耕平

⑦

トピックス

⑧

日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワークへの期待

東京大学名誉教授 石上 英一

日本古代史を専攻し奄美諸島史も学ぶ一日本史研究者として、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」への期待と要望を記したい。

私は、二〇一二年三月、コレージュ・ド・フランス（日本学高等研究院（Institute des Hautes Etudes Japonaises, Collège de France）主催のシンポジウム「Images pieuses du Japon」で、「元三大師信仰とお札」の報告の機会を得た。シンポジウムは、故ベルナル・フランク教授のお札コレクションの展覧会（二〇一一年「ギメ美術館」と論集『Ofuda : images gravées des temples japonais - la collection Bernard Frank、(IHEJ) 二〇一一年三月）刊行、お札データベース（Base d'ofuda de Bernard Frank <http://ofudarcraofr/>）公開を記念して開催された（報告集『Ofuda: Amulettes et talismans du Japon』、Bibliothèque de L'Institut des Hautes Etudes Japonaises, 二〇一四年七月）。私の参加は、

IHEJ]及びJosef Kyburz教授(CNRS)のベルナル・フランク教授お札コレクションの調査を、二〇一二年六月から東京大学史料編纂所、次いで國學院大學千々和到教授の研究グループが参加しての支援の開始の契機となる助言する機会が、史料編纂所在職中にあったことによる。二〇一二年一月にIHEJ]の松崎碩子所長にお札コレクションを見せていただいた折、『大日本史料』第一編之二十二（一九八三年十一月刊）の良源（元三大師。九二二～九八五年）の寂伝の編纂に参加した経験から元三大師と記された箱に気付き調べさせていた

ただ、コレクションの重要性を知った私は、調査への支援を松崎所長に約束したという縁があった。報告のため、中世に信仰される元三大師護符（御影大師、角大師、降魔大師、豆大師）の創出前史を検討する中で、「大師、栄を審かにして之を扶持し、形を送りて之を衛護せられむ」と結ぶ長元三（二〇三〇）年天台座主僧正慶命追薦文を、比叡山横川

における良源像崇敬の画期となる史料と考えた。追薦文理解に対句や起承転結の文構成の分析法として利用したのが、「大体」(天理図書館所蔵)に収められる「筆大体」であった。一〇〇一三世紀に増補改編された「作文大体」の出典の一つは源順撰「作文大体」であった。私は、『大日本史料』第編之二十(一九七七年三月刊)・永観元年是歳の源順(九一一〜九八三年)の卒伝の編纂に参加した経験から、池田温編『日本史を学ぶための漢文入門』、吉川弘文館、二〇〇六年一月)に執筆の機会を得た時、「源順伝から学ぶ」として順の詩文の構成分析を試みたことがあった。その際、国文学研究資料館の国文学論文目録データベースで、中沢稀男・小川正夫・山崎誠諸氏の「作文大体」諸本、神野藤昭夫氏の源順伝、田坂順子氏の扶桑集の諸研究を知り多くのことを学んだ。小生も構築に参加した史料編纂所歴史情報処理システムのデータベース群は研究に欠かせない情報資源であり、『大日本史料』『大日本古文書』などの版面画像や、謄写本・影写本の一部画像も公開され、自宅からでも検索結果を利用して閲覧できる。「良源」等で検索し、『大日本史料』等の版面を見ることで、近世初頭に至る元三大師信仰の展開に関わる様々な史料を確認することができた。また、史料を理解するために知るべき語彙・事項は、個人会員になっている「ジャパンナレッジ」で『国史大辞典』『日本国語大辞典』などにより調べた。順伝編纂の頃の情報源は、編年史料部各研究室で作成した『大日本史料』の手書の人名・書名索引や索引カードと図書館の参考資料群、書物としての『国書総目録』『国歌大観』『平安朝歌合大成』等であったことを考えると、隔世の感を覚える。歴史・文学・宗教史・思想史・美術史など多分野にわたる前

近代期日本研究において、国立国会図書館や国立情報学研究所の図書・論文情報、国文学研究資料館や史料編纂所などの資料目録・論文情報・史料集のデータベースは、必須の研究手段となっている。『国』や国文学論文目録データベースは、タイトルだけではわからない引用史料や学術用語もキーワードで検索でき研究の助けとなる。利用者としては、キーワード情報から、直接、関連する史料の史料情報データベースや画像データベースに接続できればと思う。

私が進めている『奄美諸島編年史料 古琉球期編』下(上、二〇一四年五月)の編纂で、慶長十四年(一六〇九年、万曆三十七年)の島津氏の琉球征討に関り、「鉄炮記」作者として著名な、薩南学派の禅僧文之玄昌(南浦文之。一五五五〜一六二〇年)の詩文を調べた。文之の詩文は、一般には、寛永二年版と慶安二年版(如竹の跋に下巻に「南浦戲言」を増補とある)の『南浦文集』により利用されている(『薩藩叢書』『新薩藩叢書』に慶安二年版収載)。版本所載の慶長十三年十一月「討琉球詩并序」を見るためNDLサーチで調べたところ、国立国会図書館デジタルコレクションで寛永二年版が公開されていることを知りPDF版を見ることができた。しかし、寛永二年版は討琉球詩の序のみで詩は収められておらず、詩は慶安二年版を見ねばならないことを知り、史料編纂所で慶安二年版を見た。慶安二年版には倭点も加えられている。また、鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫の文之自筆「南浦文集」「南浦戲言」「南浦棹歌」(鹿児島の大龍寺伝来)には、版本不採録の一六〇九年三〜八月の琉球関係の詩文がある。鹿児島大学附属図書館の古典籍類デジタルアーカイブで三書の画像は公開されているが、残念ながら学外から画像

は見られない。儒学史・国語学で論じられるように、文之は倭点(文之点)を四書集註等に施した。鹿児島県立図書館には玉里文庫本の複写版の「南浦文集」があり玄昌自身が詩・文に加えた文之点を知ることができるが、同館所蔵「南浦戲言」(討琉球詩并序を所収)・「南浦棹歌」は玉里島津家所蔵本の謄写本(昭和十年配架)で文之点が省略されている。そこで、鹿児島大学附属図書館の情報支援係の方の助言を得て、自筆本「南浦戲言」「南浦棹歌」の必要部分の複写を入手することができた。琉球国の日本への服属を琉球の立場から記す「喜安日記」の写本は、琉球大学附属図書館の琉球・沖縄関係デジタルギャラリーの伊波普猷文庫から画像公開されている。『奄美諸島編年史料 古琉球期編』の編纂では、伊波文庫の「異本毛氏由来記」「佐銘川大ぬし由来記」も利用した。家から遠くにある機関の史料・史料集の画像を閲覧できる情報環境はありがたい。

日本前近代史研究において、国文学資料、聖教等仏教資料、美術史資料等は不可欠の情報群である。国文学や科学史や思想史においても、典籍(書物)だけではなく歴史資料(文書・日記、帳簿、絵画史料、日本関係外国史料)は不可欠の研究情報群である。私が編纂に関わった『大日本史料』第二編の二十から二十四では、典籍の「倭名類聚抄」「三宝絵」「往生要集」「医心方」「本草和名」の撰述を扱ったし、源順・徽子女王・規子内親王の伝では文学作品としての家集・歌合・勅撰集が重要な史料であった。また天台僧明靖の伝では青蓮院聖教も使用した。国文学研究においても、文学作品の生成・普及の背景となる歴史的時空間の事象や関与者の行動を記録する文書・日記は不可欠の情報群であろう。後期撰関政治期の政治史や実在人物への

理解なくしては「源氏物語」等の作品研究は成立しない。「方丈記」研究も源平争乱や鎌倉初期政治史や神祇史への関説なくしては有り得ないであろう。近世思想史研究では和刻本漢籍は必須の研究対象であり、典籍の範囲に収められることを期待するであろう。国語学の倭点(文之点・惶窩点等)研究では倭点漢籍の版本が重要であり、それらが典籍から除外されてはならないであろう。諸学術分野の前近代期研究においては、所謂「典籍」即ち書物とその他の資料群とが総体として把握されねばならない。

また、「日本語歴史的典籍」の語が多様な資料群を包括することとは、学界の期待であると思う。この期待に応えるために、日本語歴史的典籍ネットワークが、国文学研究資料館と拠点が構築する基本データベースと共に、当面は拠点として参加しない大学の典籍系画像データベース、狭義の典籍の範囲外となる文書・日記・帳簿を対象とする日本史研究系データベース、また欧米の大学・博物館・美術館の日本典籍等の書誌・画像テキストのデータベースとの横断検索による接続により、前近代期日本研究の中心拠点となることも検討されるべきであろう。人間文化研究機構は、六機関・地域研究拠点・NDLサーチの機関間横断検索システム「nuhant」と共に、二〇一四年三月に国際的日本研究ポータルサイト「日本研究、日本における人間文化研究の国際リンク集」を開設した。nuhant・国際リンク集構築への参加経験から、「日本語歴史的典籍ネットワーク」が日本研究国際的ポータルサイト・機関間横断検索システムの必須構成部分として発展することも期待している。

「草双紙を中心とした近世挿絵史の再構築」経過報告

実践女子大学教授

佐藤 悟

草双紙は享保期から明治中期まで継続的に出版されているため、時間軸に沿った近世挿絵史の構築が容易と予想されます。草双紙は同時代の出版物の中では最下層に位置づけられ、絵入浄瑠璃本、芝居絵本、浮世草子、八文字屋本、読本、上方絵本といった他ジャンルの作品の影響を最も受けやすいものでした。草双紙の挿絵は鳥居派、奥村派、勝川派、歌川派、北斎派などその時代を代表する画工たちが担当し、これらの画工は草双紙以外のジャンルでも多くの作品を残しています。ただ草双紙は江戸中心ですが、上方の西川祐信、大岡春卜、耳鳥齋らの挿絵を研究することにより、江戸と上方の相互の影響関係を検証することが可能になり、重層的な近世挿絵史を構築できます。佐藤を研究代表者として、絵入本学会の近世関係の主要メンバーを共同研究者として本研究は発足しました。

研究の検証手段として十二月二十日(土)、二十一日(日)に同志社大学で第七回絵入本ワークショップを開催しました。絵入本学会会長服部仁(同朋大学)の開会の辞に続き、日比谷孟俊(慶應義塾大学)「歌舞伎、天下祭、吉原俄の共通点と男芸者の役割」、山名順子(川村学園女子大学)「山

東京伝の合巻における挿絵とその表象―磯馴松金糸腰蓑』を例として―」、村上敬(関西大学・院)「応挙写生帖の意味」、高木元(千葉大学)「錦絵の〈填詞〉をめぐる」、神林尚子(東京大学・院)「へお竹大日」もの草双紙をめぐる―於竹大日忠孝鏡』を中心に―」、北川博子(あべのハルカス美術館)「流光齋画役者絵本、『画本行潦』の意義」、ローレンス・マルソー(オークランド大学)「鳥山石燕画作『画図百鬼夜行』シリーズの挿絵と詞書きの考察」、クリストフ・マルケ(フランス国立東洋言語文化大学・日仏会館)「北斎『諸職絵本 葛飾新鄙形』フランス国立図書館蔵本の仏訳と復刻出版」、浅野秀剛(大和文華館)「初期浮世絵の画題―『薄雪』(定家)を中心に―」、廣瀬千紗子(同志社女子大学)「享保期江戸歌舞伎せりふ正本考―物売りのせりふをめぐる―」の諸発表がおこなわれました。質疑応答では『葛飾新鄙形』に描かれた建物について建築史の専門家から発言があるなど、挿絵研究の可能性を示唆するとともに、異分野からの視点の重要性を再認識させられるなど、充実した内容となりました。佐藤が基調報告として「近世挿絵史の構築をめぐる諸問題」と題し、草双紙を中心とした挿絵研究の可能性と問題点が報告され、その

後のマティ・フオラー(ライデン民族学博物館)、山田和人(同志社大学)を司会とした自由討議では、画題を中心として挿絵の研究を行うという佐藤の提案に対し、古典の素養に頼りすぎるという批判があるなど、活発な議論が行われました。山本和明(国文学研究資料館)による閉会の辞があり、無事閉会しました。

絵入本ワークショップⅧは今年の十二月十二日(土)・十三日(日)に松本の日本浮世絵博物館で開催される予定です。



日本漢詩文における古典形成の研究ならびに 研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討

大阪大学大学院文学研究科
（コミュニケーションデザインセンター）准教授
合山 林太郎

本プロジェクト「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」（通称日本漢文学プロジェクト）の主な研究目標は、次の二点です。

一、日本漢文学における「名詩」や「名文」とされる作品（キャノン）が、いつ、どのような過程を経て定まったかを分析すること。その考察を通じ、日本漢詩文の研究や評価の文脈を明らかにすること。

二、最新の研究成果を反映し、かつ、世界の様々な国や地域の研究者によって共有可能な日本漢文学の通史（古代～近代）を検討すること。

この目標を達成するために、次に掲げる十三名の日本漢文学や中国学の専門家に集まっていたいただきました。

浅見洋二、康盛国、金程宇、高兵兵、滝川幸司、
中本大、新稲法子、仁木夏実、福島理子、
マシューフレリー（二〇一五年度）、町泉寿郎、
湯浅邦弘、鷲原知良（五十音順、敬称略）

メンバーの間では、二の通史の作成を中心にすでに活動を開始しています。昨年十一月二十九日、本年一月十日の二回にわたり、研究会を開き、新たに

作る日本漢文学史のイメージについて認識を共有しました。議論の中で、漢文学の専門家ではない方も手に取ることができ、ベーシックなものを目指そう、という大きな方向性が確認され、現在、その具体的な構成について検討を行っています。

このプロジェクトの一つの使命は、日本文学領域がこれまで蓄積してきた漢詩文についての研究を、世界に向けて発信することです。とくにこの通史に関しては、中国語、韓国語、英語などの主要外国語に翻訳できるように、記述のあり方を工夫するつもりです。

また、二に述べた日本漢詩文のキャノン・スタディーについては、合山が「永井荷風による館柳湾評価の背景」（『語文』一〇三号、二〇一四年十二月）を発表し、江戸時代の漢詩人館柳湾について、よく知られた永井荷風『葎斎漫筆』における言及以外にも、近世・近代において様々な評価がなされていることを指摘しながら、同様の手法で分析を続けてまいります。

こうした研究の成果は、三月二十三日（月）に大阪大学において開催される「第一回 日本漢文学総合討論」、そして、八月末に中国・西北大学において

て開催される和漢比較文学会特別例会において、パネル・ディスカッションなどの形で発信する予定です。なおプロジェクトの活動については、次のURLのブログにおいて随時ご報告いたします。

《<http://nihonkanbungakublogspot.jp/>》

本プロジェクトは、開始以来、多くの関係者、団体の方よりご助力をいただいております。厚く御礼申し上げます。今後も、多くの方と連携しながら研究を進める所存です。引き続き、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。



分野別画像収集・医学 — 研医学会図書館 —

古典籍共同研究事業センター 特任准教授 金田 房子

三〇万件にも及ぶ大規模な画像データベースの作成にあたって、本プロジェクトでは分野別の収集を行っています。これまで各専門に分かれて情報の共有がなされてこなかった各分野をまたぐ研究を促すという意図を持つものですが、特定の分野に特色のあるコレクションを集中的に撮影させていただいて提供できるというメリットもあります。もちろん網羅的に行われる収集もありますが、その中でも「分野」ということは常に意識されています。

では、「分野」とは何を指すのでしょうか。それは、古典籍総合目録での分類項目をもとに、神祇・仏教・産業・理学…などのように大きく二〇に分類したものです。そして、はじめに対象とした分野が

「医学」でした。私たちが最も関心をもっている分野とも言えるのではないのでしょうか。

医学分野の画像を集めたい、その私たちの依頼を快く受けて協力して下さったのが、銀座のソニービルのすぐ近くの眼科医院に併設の研医学会図書館でした。研医学会図書館に

は、約一八〇〇点の古典籍の医学書が所蔵されています。撮影は本年度で二年目となり、一年目は『解体新書』など有名な著を中心に、本年度は、貴重な古活字版など古いところから、なるべく他の機関にはあまり所蔵されていないものを選んで撮影しました。

撮影に先立って、まずプロジェクト研究員が訪問して原本の状態のチェックや丁数の確認などを行います。昨年度は千葉真由美・井黒佳穂子、本年度は井黒佳穂子・片岡耕平が訪問して、スムーズに撮影が行えるように準備しました。各年それぞれ約五〇点、一ヶ月にまたがって大きな機材を置かせていただくことになり、大変ご迷惑をおかけしていますが、温かいご理解をいただいております。

こうしていただいた研医学会の画像は、国文学研究資料館ホームページでアップされています。まとめて閲覧するには「マイクロデジタル一覧」のページにある「デジタル公開所蔵者一覧表」からが便利です。また、研医学会のホームページにも美しいサムネイルの付された画像が公開されていますので、こちらもあわせて御覧下さい。

これら医学関係書の利用の便をはかるため富士川游著『日本疾病史』のテキスト化を行い、そこからのリンク付けを行う予定です。初版は明治四十五年のかなり堅い文章ですが、江戸時代以前の病についての考え方が丁寧に考察されています。他に、医学書のタグ付けも計画されています。これらも手掛りとして、私たちの先人が病に向き合ってきた歴史を、画像を通して繙いていただければと願っています。



引越しの花

コラム

春は、出会いと別れの季節と言います。進学・卒業・就職・転職など様々な事情で、人の移動が多い季節です。新たな門出を迎えた人に花を贈る、あるいは、自らの門出に贈られる。そんな経験は、おそらく誰にでもあるでしょう。人が新たな環境に身を移す局面で、花はかなり重要な役割を果たしています。そしてそれは、たとえば江戸時代でも同じでした。

古来、人間は草花を愛でてきました。もちろん、自然に生えた、ありのままの姿を愛でることともあったでしょう。一方で、それらを手折り、生活の場に取り入れてもきたのです。江戸時代は、その作法の体系化が本格的に進んだ時代でした。江戸時代初期、二代池坊専好は座敷飾りの一環として室町時代に成立した「たて花」を理論化し、「立花」という様式にまとめます。「たて花」が、しんと下草とで成るのに対し、心・正心・副・請・流枝・見越・前置という七つの構成要素を持つ様式です。

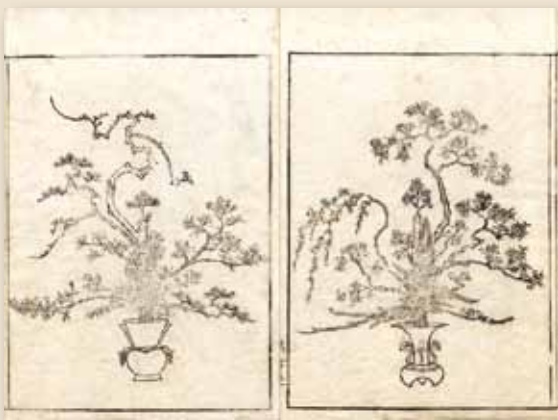
理論と形式とを併せ持つ「立花」は、町人層にまで浸透し、教則本としての花道書が相次いで出版されました。天和四（一六八四）年出版の

『立華正道集』は、そんな花道書の中でも早い時期のもので、ここでは、季節や局面ごとに用いるべき草花の種類が列挙され、実際に草花を立てた様を描いた立花図も多数収められています。江戸時代に生きた人々が、どのような種類の草花を、どのように観賞していたのか、を容易く知ることができるわけです。

この本で取り上げられている局面の一つが「移徙」、すなわち引越しです。「赤き色ある草木を嫌へり。外のいろにてあしらふべし。檜木をかならずさす事となり。一瓶にぎやかにさすべし（赤色がある草木を避け、他の色をあしらうべきである。檜木を必ず挿す。花瓶に賑やかに挿すべきである）」。

これが、引越しの際に立てる草花のあるべき姿だそう。なぜ赤色が嫌われ、檜木が必要とされるのか。新居に移って新たな生活を始める時のことを思い描いてみれば、答えは簡単かもしれません。赤色は火を思わせるから避け、檜木は「火のく（退く）」に通じるから必ず挿す。要するに、火災に遭わぬことを祈念しているのです。

「立花」は、単なる自然風景の複写ではなく、抽象化された自然の追及・表現を志向しており、その意味で芸術と呼びうるかと評されます（井上治「花道思想における出生と花矩に関する試論」、『人文学の正午』一号、二〇一〇年など）。花道が芸道として確立する過程で、「立花」の成立は一大画期でした。芸道としての花道は、日常の中で何気なく通用していた験担げんかぎ、あるいは言葉遊びの類をも組み込みながら形を成すのです。



『立華正道集』より

国文学研究資料館蔵 請求番号: 49-62-1~4

シンポジウム開催 (当センター主催・共催)

◆国際共同シンポジウムISHMEA

〔日時〕平成二十七年(二〇二五)年三月六日(金)～九日(月)

〔会場〕アクアヴィラ伊勢志摩

(三重県志摩市大王町船越三三三八―)

〔主催〕四日市大学関孝和数学研究所

<http://www.seki-kowa.org/>



◆日韓国際シンポジウム「太閤記をめぐる諸問題」

〔日時〕平成二十七年(二〇二五)年三月十四日(土)

十四時～十七時三十分

〔会場〕実践女子大学渋谷校舎内

(東京都渋谷区東一―一四九)

〔主催〕実践女子大学文芸資料研究所

<http://www.jissen.ac.jp/bungei/eiribon/>

◆公開シンポジウム「第一回 日本文学総合討論」

〔日時〕平成二十七年(二〇二五)年三月二十三日(月)

十時三十分～十七時三十分

〔会場〕大阪大学豊中キャンパス文学研究科本館大会議室

(大阪府豊中市待兼山町一―五)

〔主催〕「日本文学プロジェクト」共同研究グループ、

大阪大学大学院文学研究科日本語の歴史的典籍の

国際共同研究ネットワーク構築クラスター

3本のパネル・ディスカッション「日本文学の古典化と近代の文芸批評及び教科書」「祖述の様相―近世詩文の内なる唐土―」「日本文学の基層―宗教学問・歴史―」、全体討論「新しい日本文学の通史を考える」によって構成します。多くの方のご来場をお待ちいたしております。

画像情報撮影事業を

平成二十七年(二〇二五)年度から開始します

平成二十七年(二〇二五)年度から、国内拠点大学における画像情報撮影を開始します。この撮影は、当事業の主要な目的の一つであるデータベース構築に向けた重要な活動です。

共同研究の実施に合わせて計画的に分野別収集を行うこととし、まずは、医学・理学等の分野を中心に、北海道大学、大阪大学、慶應義塾大学等から所蔵する古典籍の撮影を進める予定です。

ふみ 第4号は、
平成27(2015)年
6月発行予定です。

ふみ

古典籍共同研究
事業センターニューズ
第3号

〈発行日〉

2015(平成27)年2月23日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町10-3

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>